

第29回高知女子大学看護学会報告

看護とコラボレーション — 質の高い保健医療サービスを提供するために —

中野綾美*

第29回高知女子大学看護学会が2003年7月26日(土)、山崎美恵子学会長のもと、『看護とコラボレーション—質の高い保健医療サービスを提供するために—』をメインテーマに高知市文化プラザかるぽーとで開催された。参加者は約160名であり、学会員をはじめ、準会員、一般参加者を含め、多くの地域の看護職者の方々をお迎えし、盛会のうちに無事開催することができた。

当日のプログラムは、山崎美恵子学会長の挨拶に始まり、高知県医師会長村山博良氏、高知県看護協会長秋田美智子氏の来賓挨拶の後、高知女子大学教授井上郁氏の『保健医療におけるコラボレーション—看護にとっての意味—』講演会(午前の部)、医療法人近森会常務理事・看護部長 高知女子大学看護学部臨床教授梶原和歌氏の『医療現場におけるコラボレーションの実践』が開催され、全体討議が行われた。講演会終了後、第29回高知女子大学看護学会総会が開催された。

学会長挨拶

山崎美恵子学会長より、第29回高知女子大学看護学会を開催するにあたり、地域の看護職者の皆様、卒業生の皆様の支援を得て今日を迎えることができたことに対する感謝の言葉が述べられた。

今回の学会のメインテーマとして、『看護とコラボレーション—質の高い保健医療サービスを提供するために—』をメインテーマに選んだ意図について、21世紀に入り、保健・医療・福祉を取りまくめざましい環境の変化の中で、質の高い保健医療サービスを提供するために看護職は、様々な専門性を持つ他の専門職者や患者とその家族、地域や関係機関

などとどのようにコラボレートするかが課題となっていると、コラボレーションの必要性が述べられた。

また学会の準備のために学会運営委員の皆様をはじめ、学内外の方々のご支援ご協力を賜ったことに対する感謝の意が述べられた。



*高知女子大学看護学会企画委員長

講演会 (午前の部)

保健医療におけるコラボレーション — 看護にとっての意味 —

高知女子大学 教授 井上 郁氏

高知女子大学教授 井上 郁氏による、『保健医療におけるコラボレーション—看護にとっての意味—』というテーマの講演が行われた。会場を埋めた参加者は、聞き慣れない『コラボレーション』概念について、具体的な例を示しながら語る井上氏の講演に聞き入っていた。

講演では、まず、コラボレーションとは何か、概念定義の明確化がなされ、“対話は相互性のもとであり、相互性がある中で、目標や資源が共有され、広い視野での取り組みができ初めてコラボレーションが成り立つ”という、コラボレーションの原則が提案された。このようなコラボレーションは、ケアの対象者の多様化、ケアの場の多様化、ケアに関わる人々の多様化の中で、今後益々重要となることが語られた。さらに、コラボレーションを行うために必要とされる能力として、コミュニケーション能力、柔軟な思考力、他者の価値観の尊重、自分にとって異質なものを取り入れる寛容さと忍耐力が必要であり、“多様性を力に変える”ことが課題であると提案された。今後、看護とは何か、何をするのか、看護の自律性を自ら問い、コラボレーション

を阻む専門職の壁をどのように乗り越えていくのか、専門職としてできるケアをどのように拡大していくかという課題に取り組んでいかなければならないことが示された。

講演を通して、馴染みの薄かった「コラボレーション」概念の理解が深まり、“看護におけるコラボレーションとは”という基本的な考え方を学び、今後どのようにコラボレーションについて考え取り組んでいくことができるのか方向性を私たち参加者に与えてくださった。



講演会 (午後の部)

医療現場におけるコラボレーションの実践

医療法人近森会常務理事・看護部長

高知女子大学看護学部 臨床教授 梶原 和歌氏

午後の部では、医療法人近森会常務理事・看護部長、高知女子大学看護学部臨床教授 梶原和歌氏による講演『医療現場におけるコラボレーションの実践』が開催された。参加者は、梶原氏が語られる、臨床の場での生き生きとしたコラボレーションの実際に引き込まれるように聴き入っていた。

講演では、柔軟な組織風土を歴史的に培っ

てきた近森会で、実践の中で創造してきたコラボレーションの様々な取り組みが、具体的にわかりやすく、生き生きと語られた。コラボレーションを中心とした実践例は、救急センター、内視鏡室・血管造影室での実践、クリニカルパスとパス大会、コミュニケーション委員会、栄養委員会の実践、薬事委員会・倫理委員会など多義にわたる。

チーム医療の中で大きな要素であるコラボレーションを行っていく上で、その話し合いが行われるシステムに看護職者が入っていることが重要であると語り、看護職者は、チーム医療をリードしていけるのではないかと提案された。コラボレーションに必要なことは、患者さんを中心にして良いことをしたいという発想であり、医療の質の向上と効果、効率、患者さんにこうなってほしいというアウトカム的一致、情報収集、分析能力を高めること、職種間の壁を破っていくこと、協働部分を共有していくこと、その中で『患者さんの治癒力を高める、引き出し生活支援をする』という看護の専門性を発揮し、他の専門性を尊敬することであると語られた。

何よりも“患者さんが幸せになれるように”を大切に、組織の中でコラボレーションを根づかせてきた梶原氏の講演は、参加者に、概念として馴染みの薄かったコラボレーションが、看護職者が専門性を発揮する中ですでに実践されているという驚きをもたらすと共に、

様々な保健医療の場で、看護職も専門性を発揮しコラボレーションの取り組みをすることができるのではないかと、エネルギーと勇気を与えていただいた。

第29回 高知女子大学看護学会総会報告

第29回高知女子大学看護学会総会が平成15年7月26日15:45～16:30に開催された。山崎美恵子学会長の挨拶の後に、議長団が選出された。各委員会の平成14年度の活動報告の後、平成15年度の事業計画について審議を行った。平成16年5月～6月にかけて公開講座を開催すること、平成16年7月24日・25日に第30回高知女子大学看護学会を開催すること、奨学金制度の運用、学会誌の発行について審議され承認された。さらに、奨学金制度がより会員の皆様に利用しやすいものになるよう、奨学金の返還開始時期について、大学院を修了した6ヶ月後より返還を開始することが提案され承認された。

